公文健太郎写真展『BANEPA -ネパール 邂逅の街-』

公文健太郎

屋根の上に並んだコンクリートの柱の先から、むき出しの鉄筋が空に向かって突き出ている。お金が貯まったらいつでも建て増しができるようにと、最上階の仕上げはいつも後回しになる。大通りの脇の土の路肩には、雨が降ると家畜の糞と生ゴミが混ざった泥の水たまりが連なり、乾くとバスが通り過ぎるたびにその泥が白い砂埃となって舞い上がる。斜めに傾いた電柱には、グルグルと黒い電線が絡まって乗っかっている。中にはその端がふらふらと宙に浮いているものまである。大通りを一歩入ると、タイヤより上半分がごっそりと無くなったバスや、錆び鉄の固まりのような色をした小型のトラックが残骸のように転がっている。

ネパールの首都カトマンズから東に３０キロ。人も、野菜も、家畜も集まっては散っていく街、バネパ。農村に向かうため、僕もこの街でバスを乗り継ぎ、何年もの間通り過ぎて来た。そんなバネパの街に僕が通うようになったのは、長年農村で撮り続けて来た少女ゴマが結婚し、村からこの街の洋品店に嫁いで来たことがきっかけだった。田園風景が広がり、時間がゆっくりと流れる農村で、ネパールでの経験と出会いの多くを得てきた僕は、彼女を撮り続けるためとはいえ、この騒々しい街での暮らしに期待が持てなかった。「ほころびだらけの風景」が広がるこの街が好きにはなれないと思っていたからだ。

そんな「ほころびだらけの風景」を好きになってきたのは、ここに住み、歩きまわり、人々と話すことを通して、この街の楽しみ方を知るようになってからだった。毎日ゴマが営む洋品店に通い、日がな一日店番をしながら訪ねてくる買い物客や、商店の仲間たちと他愛のない話で盛り上がる。数あるマンゴーの種類の中で最もおいしい種類を探し、露店を訪ね歩く。部屋の電球を取り替えようと電気屋のおやじに相談する。ついでついでと脇道を入り、路地を曲がる。歩けば歩くほど、出会えば出会うほどに、そこにある風景が瑞々しく活きたものになってきた。

鉄骨の飛び出たレンガづくりの住宅には派手な水色の窓枠が並んでいた。どう考えてもアンバランスな壁と窓の色の取り合わせは、じっと眺めているとパッチワークのように見えてくる。家が持つ個性を比べてみたり、好みを探してみたりするとこんなに楽しいことはない。
泥水がたまる路肩の水たまりを子供たちがぴょんぴょんと飛び越えていた。水たまりの中に点在するゴミの固まりを浮き島のように使って、その上を右、右、左と飛び越える姿は、一瞬の賭け事のようでハラハラドキドキさせられる。傾いた電柱とその下で老人たちは世間話を続けていた。斜めの柱とその上に乗っかる黒い電線の固まりは、老人たちの煤で汚れた上着と、ネパール伝統衣装の一つであるトピという帽子と重なって見えた。彼らのくたびれた衣装が夕暮れの風景の中にとけ込んでいく。街はずれに捨てられていたバスの残骸は、雑多な部品の組み合わせで、立派な一台のバスに生き返った。鉄枠が組まれ、その枠に鉄板を貼付け、走る鉄の箱が出来上がる。バスに乗る時、暗い車内で僕は溶接の火花を思い出しながら、バスの車内の金属の継ぎ目を探してみたりする。

街のいたるところにあった「ほころびの風景」が人々がつくり出す生きた瞬間との出会いを通して「つぎはぎの風景」へと変わる。この街に広がるつぎはぎ模様の面白さに、僕は飽きることがなかった。